

○● 研修会特集 公開講座 ●○

医療の中の図書館員 —より専門的なサービスをするために—

首藤 佳子

I. はじめに

病院図書室に関する昨今の医療動向には、EBM の推進、患者への情報提供がある。医師卒後研修の義務化も決まり、病院の教育や情報提供の機能および情報の質が重視されるようになった。その一方で、病院図書室では、マンパワーの低下傾向（職員数の減少、非常勤・派遣職員の増加）が顕著である。これは、環境の変化にもかかわらず、図書館機能に対する考え方が旧態依然とした「図書の整理と管理」から脱しきれていないこと、新たな役割と機能に関する明快な枠組みも未だ示されていないことによる。改めて職分の意義を検討し、職能を開発することが今病院図書室の大きな課題である。

職能開発の方向としては、医療の動向に添って二つの方向を考えてみるのが妥当であろう。一つは、医療提供者への専門的サービスの強化と質の改善であり、もう一つは医療を受ける側、すなわち患者や家族、ひいては地域住民への医学医療情報提供サービスである。

本稿では前者に関する著者の経験のいくつかを紹介し、参考に供したい。

II. 「慢性関節リウマチ診療ガイドライン」策定および「京大臨床疫学特別ワークショップ」への参加協力の経験

近畿病院図書室協議会では、「慢性関節リウ

マチ診療ガイドライン」策定のために、この2年間、京大の研究者と共同で EBM 指向文献の検索と文献のエビデンスレベルの判定およびデータ処理を行った。参加した図書館員はそれぞれ6名。使ったデータベースは PubMed、医中誌 Web、JOIS コマンドラインである。

検索に先立って研究者から2回にわたり、研究デザインおよび疫学用語、主なバイアス等の講義を受け、PubMed 検索に関しては、絞り込みの優先順位の考え方、Clinical Queries 等の解説を受けた。医中誌 Web、JOIS の検索では、事前に JST および医中誌刊行会から、それぞれのデータベースにおける EBM 指向文献検索のための用語や Indexing について説明を受け、双方から模範検索式の提供も受けた。

「京大臨床疫学特別ワークショップ」（毎年夏2回）も、同協議会が参加協力した仕事で、これも2年にわたって経験した。これは、EBM ワークショップで、「エビデンスを探す」「エビデンスを評価する」ことを目的に開かれたものである。疑問の定式化（PECO または PICO）により課題を整理し、主要データベースを使ってエビデンスレベルの高い文献を検索、抽出する。さらに、文献の内容を詳しく吟味していく。これがワークショップの全プロセスである。

対象は医学部大学院生や医師などで、病院図書館員（毎年5名）が文献検索実習指導、PubMed 解説、医中誌 Web の解説、検索課題（3題）の模範解答例提出、PubMed 設問集の草案づくりなどを担当した。また、文献評価のためのグループワークにも参加した。

SUTO Yoshiko

星ヶ丘厚生年金病院図書室

ZXC02530@nifty.com

Ⅲ. CASP ワークショップ

CASP (文献の批判的吟味) については、上記京大ワークショップの他に、EBL 研主催の名大ワークショップを経験した。シナリオ化された課題を解決するために、用意された文献の読み込み、内容の吟味評価 (結果は信頼できるか、結果は何か、その結果は現在の課題解決に役立つかについて 11 のチェックポイントを使う) を行うプログラムである。名大では、図書館員の他、薬剤師、医師などが参加した。通常、このワークショップには図書館員が必ず参加して文献検索を担当するようである。

Ⅳ. これらの体験から得たこと

これらの体験から、病院図書館員が医療や医療スタッフの中で一つの専門職として認められ、期待されるために必要な資質の一つをかなり明確に知ることができた。すなわち、膨大な情報の中から目的に合った、科学的な根拠のある、有用な情報を選ぶ、より精密なフィルターとしての機能である。そのためには、図書館員は次のことについて知識と技術を習得し、またこれに習熟する必要がある。医学研究の種類とタイプ、エビデンスに関する用語と概念、医学文献の各種データベースの機能と特性、検索技能の向上、基本的なデータ処理、文献を取り扱う際のマナーや評価選択の観点などがその主なものである。

また、教育・トレーニングの方法や意義についても多くの示唆を受けた。研修は明快な目的とそれを達成するための段階的なプログラムが用意されることが肝要であり、さらにこうした研修教育は単にスキルアップに役立つのみならず、意識改革の面でも効果的であることを実感した。

今回の 2 つの経験は、共に他の専門職との共同作業、グループワークであったが、図書館における文献提供サービスの一種のシミュレーションのようなものでもあった。この経験から、文献読み込みの際の職種による観念の相違や、

現実への適用についての考え方などを知ることができた。病院の現場においても、「情報」を中心にして他の職種の専門職と教えあい、協力しあい、お互いの職分について理解を深めることは資するところが大きで、よりよい医療の実践にとっても有益であろうと考える。

Ⅴ. 結び

こうした医療や医療提供者への図書館員の新しい関係、役割に関する文献の一つに、「The Informationist : A New Health Profession?」¹⁾がある。ヘルスケア・チームの中に情報スペシャリストとして図書館員が参加していくといった内容である。よく似た活動に 20 数年前日本に紹介された Clinical Medical Librarian の活動がある。しかし、当時は日本ではこれはほとんど普及しなかった。この活動を支えるスキルとその修得プログラム、教育メソッドが明確に示されなかったことが、その理由の一つである。

しかし今回は、EBM の推進という社会的な大きな背景がある。図書館員よりも、医師や看護師、コ・メディカルなど医療スタッフの中にこの EBM の考え方が浸透しており、医療スタッフ主導である。また、医学情報データベースはこのような医療の動向を敏感に反映して、EBM 指向文献の検索のための機能改善を進め、一方では文献検索法やエビデンスの評価に関する学習プログラムが開発提供されている。その意味で、病院図書館員が、医療への寄与、サービスの強化と質の改善に挑戦すべき絶好の機会を迎えていると言える。他の専門職との連携を通して医療の中での定着を試行すべきである。

参考文献

- 1) Davidoff F, Florence V: The Informationist: A New Health Profession? *Ann Intern Med.* 2000; 132(12):996-998.